



胆振地区水産技術普及指導所、渡島北部地区水産技術普及指導所、栽培水試と協力し、噴火湾4地点(伊達、虻田、八雲、森)のほたてがい養殖漁業区画において、環境調査を7月に実施しました。

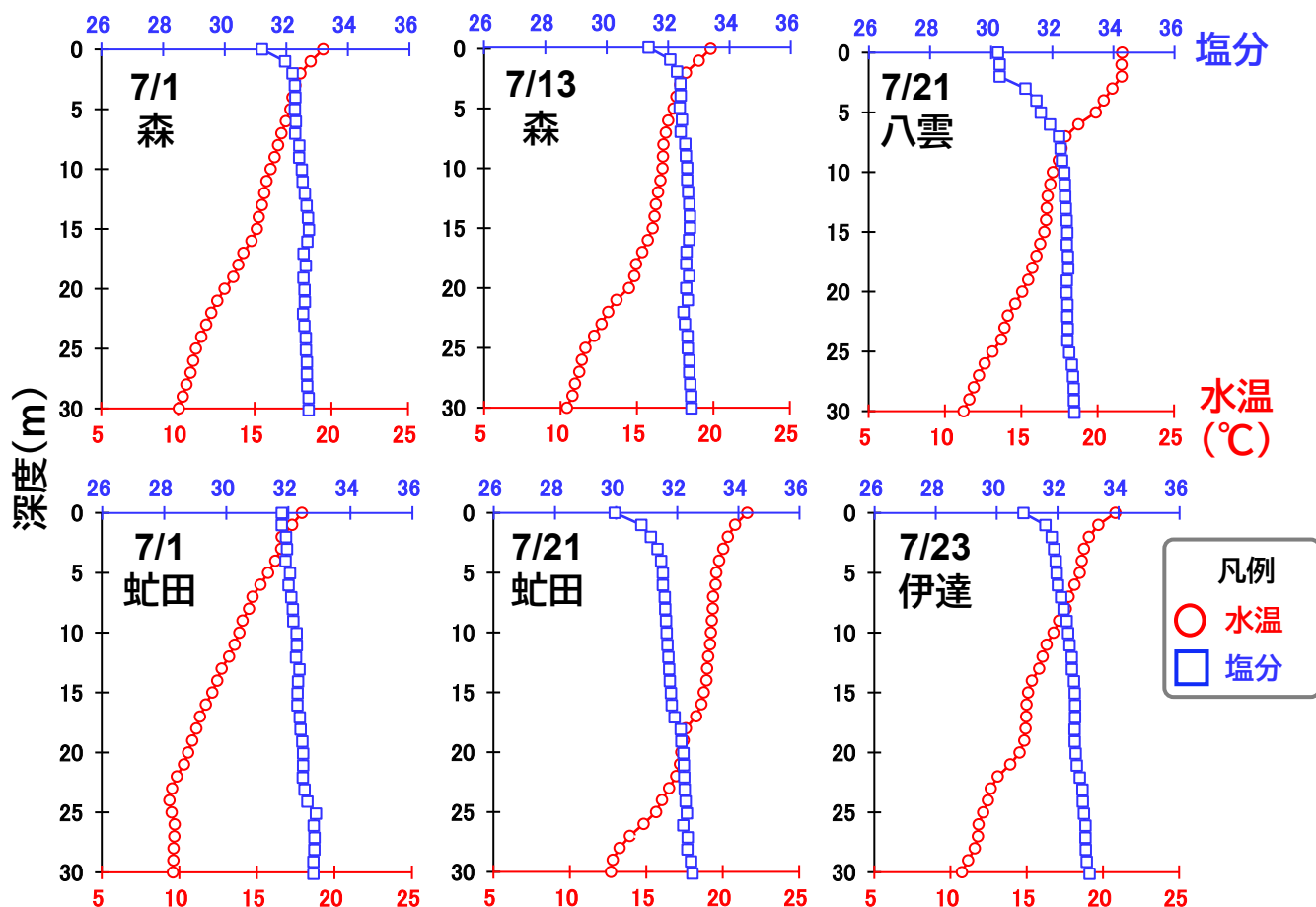
概要

- 水温の鉛直差が小さい、高水温および貧酸素はみられず
- 引き続き、高水温への警戒は必要
- 8月の海洋環境が「稚貝のできが悪い年」の特徴と類似しているか否か、注視していきましょう
- ホタテガイに有害なカレニア・ミキモトイは検出されず

図1 各地区の海洋環境

水温は23℃を超えていない。貧酸素なし。

- 23℃を超える高水温はみられませんでした。八雲の5-15m層平均水温は17.1℃と、平年(1991-2025年の平均: 15.7℃)よりも1℃程度高い状況です。
- 水温の鉛直差が小さいです(7/13森、7/21虻田)。時化の影響とみられます。
- ホタテガイ養殖漁場における低塩分や貧酸素は認められません(図なし)。



調査実施機関

森: 渡島北部水指、八雲: 函館水試、虻田: 胆振水指、伊達: 栽培水試

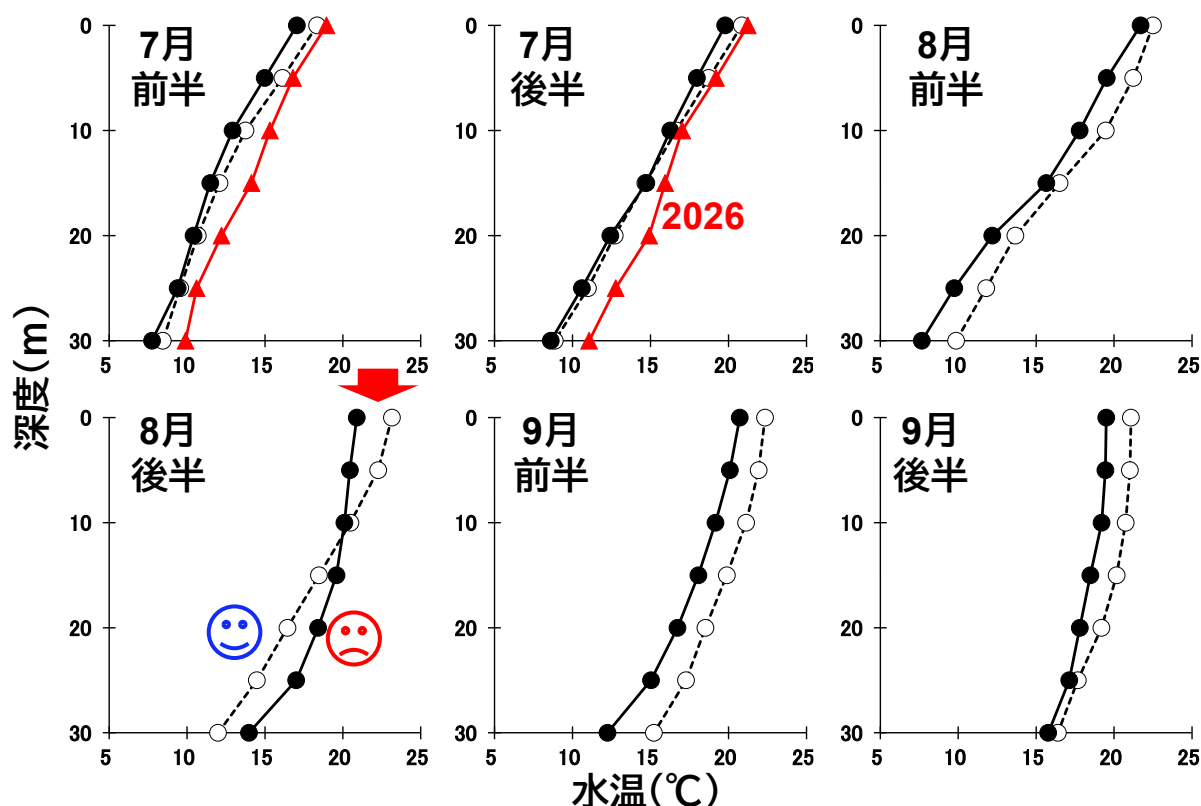
※農林水産大臣が定めた持続的な養殖生産確保を図るための基本方針では溶存酸素量の目標値が5.7mg/Lとなっています。

図2 水温鉛直分布

過去と比べて高い。今後の水温動向に注意。

養殖ホタテガイの「稚貝のでき(下部参照)」と夏季の環境条件について

- 夏季の水温の鉛直分布について、「稚貝のできが良かった年」と「稚貝のできが悪かった年」を比較しました。
- 8月後半の水温・塩分の鉛直分布は「稚貝のできが良かった年」と「稚貝のできが悪かった年」で明瞭な差がありました(参考: [試験研究は今 No.888](#))
→「稚貝のできが悪い年」は水温の鉛直差が小さい(特に、8月後半)のが特徴
- 今後、「稚貝のできが悪かった年」の特徴に近い年の場合、**仮分散・本分散の際の籠への入れ数を減らす、本分散時期を早める**などの対策により、環境の影響を軽減できる可能性があります。
- 9月上旬に改めて、水温の鉛直分布についてお知らせします。



○ 稚貝のできが良かった年 😊 ● 稚貝のできが悪かった年 ☹️ ▲ 2026年

※2010年～2026年、伊達・虻田・八雲・森地区の月1,2回の観測結果を各年各月の前後半の深度別に「稚貝のできの良い年」、「稚貝のできの悪い年」で平均しました。

「稚貝のでき」とは？

「稚貝のでき」とは、耳吊り直前の稚貝の正常貝率のことを意味します。正常貝とは変形・欠刻といった外部形態異常貝および死貝を除く、耳吊り貝に適した稚貝のことを指します。また、「稚貝のできが良い年」とは正常貝率が80%以上の年とここでは定義しました。なお、耳吊り貝の生残率が大きく低下する(いわゆる大量死)世代では、稚貝のできが悪い傾向があります(参考: [金森ほか2022](#))。

稚貝のできが良かった年 😊 … 2010～2014, 2016, 2020～2025年

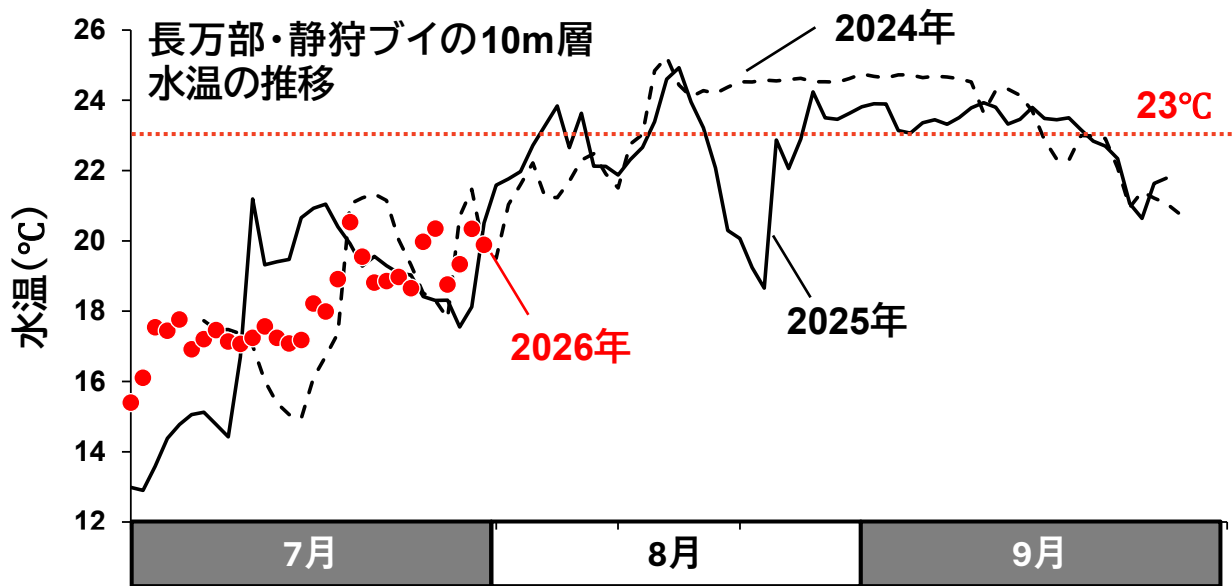
稚貝のできが悪かった年 ☹️ … 2015, 2017, 2018, 2019年

※渡島北部地区水産技術普及指導所の耳吊り前稚貝調査結果を参考

図3 ブイの10m層水温

昨年と一昨年と同程度の水温で推移

- 2024、2025年ともに、8～9月にかけて高水温(目安23℃)が数週間継続しました。2024年は2025年よりも水温が高く、長期間継続したため、稚貝への影響が大きかったと考えられます。
- 2026年の水温は7月末現在、2024年および2025年と同程度で推移しています。
- 函館水試で発行している噴火湾表層水温2週間予報では8/20まで23℃を超えるような高水温は予想されていません。ただし、気象庁の向こう3ヶ月予報では8～9月は平年並み～高いとされており、引き続き、8月後半以降の予報を注視してください。



向こう3ヶ月気温予報(2026.7.21発表)※気象庁HPより

		平均気温 8月	平均気温 9月
北海道	日本海側	低20 並40 高40% 平年並か高い見込み	低30 並40 高30% ほぼ平年並の見込み
	オホーツク海側	低20 並40 高40% 平年並か高い見込み	低30 並40 高30% ほぼ平年並の見込み
	太平洋側	低20 並40 高40% 平年並か高い見込み	低30 並40 高30% ほぼ平年並の見込み

図なし 有害プランクトン

カレニア・ミキモトイは出現していません。

- 図1で示した4地点で有害プランクトンの監視(検鏡調査)を行いました。
- ホタテガイへの有害性が確認されているカレニア・ミキモトイや近縁種のカレニア・セリフォルミス(2021年道東赤潮の構成種)は検出されませんでした。
- 一方、魚類への有害性が知られている複数種の植物プランクトンが低密度で出現しています。なお、これらの種は過去にも噴火湾での出現歴がありますが、これまでホタテガイへの漁業被害の報告はありません。
- 7月から9月の期間中、有害プランクトンの監視を続け、赤潮化の兆候等を早期に捉えられるように取り組んでいきます。

※本調査の一部および情報配信は北海道ほたて漁業振興協会からの受託研究により実施しています。